令和６年能登半島地震におけるコーディネーター大阪第４班の活動

国際医療救援部　光森　健二

派遣期間：2024 年 2 月 24 日（土）～3 月 1 日（金）
派遣場所：　石川県輪島市

今回輪島の医療福祉調整本部での赤十字コーディネーターとして派遣されました。まずコーディネーターってなにかといいますと、赤十字が救護班を送る際に現場の近くでほかの団体と情報交換しながら被災者の方々に求められる援助を重複やもれ落ちがないように適切に配置していく調整役です。災害時には被災地では家屋の倒壊や電気水道といったインフラの破壊によって自宅に住めなくなった被災者の方々が避難所に身を寄せます。まずは食料や飲料水の確保が必要となります。また災害で怪我をしたりするだけでなく、避難所の厳しい環境で体調を崩したり常備薬を失ったりして治療や診療を急いで受ける必要のある方々が通常より増えています。しかし被災地では病院や診療所なども被害にあって機能しなくなります。それだけではなくて病院まで行く交通手段も機能しなくなることがあります。最近は災害時には医療の分野だけでもたくさんの支援団体が現地に医療救護チームを送り込みます。これらのチームが自分たちだけで活動する場所や活動内容を決めてしまうと、ある所には医師や看護師がたくさんいるのに、けが人の多い別の場所にはだれも助けに行っていないということや、ある団体が救援にきたけど１週間で帰ってしまってあとはだれも来ないといったことが過去の災害では実際に起きてきました。

そこで被災地の都道府県庁と地域の中核病院や市町村の保健所にそれぞれ医療救護の団体の調整役が滞在、中央から大きな方針を現場に指示して現場の各団体の調整役がその方針のもとそれぞれの救護班が連携して被災地全体をもれや切れ目なく医療が提供できる体制を作ります。

私は １ 月の派遣に続いて２月２４日から輪島市の医療福祉調整本部にコーディネーターとして派遣されて派遣されました。地震の発生から２か月近くたち輪島までの道路もある程度復旧（といっても応急処置）して避難所にも段ボールベッドや仮設トイレなどの導入も進んでいていますが、仮設住宅の建設はまだまだこれからといった状態で輪島市だけでも２０００人の被災者が避難所におられるとのことでした。５月末までは避難所は残るとのことですが、巡回診療を行っても投薬や処置が必要な方は少なく、これからの生活がどうなるかといった不安を訴えられることに対して傾聴する心のケアとしての活動が主体となっていました。私は現地の病院や医院が再開しているため、通院や往診、救急受診といったもともとの医療へもどるための調整として医師会の先生方やほかの援助団体と足並みをそろえるよう話し合い、交通手段の確保について市役所と協議して医療救護班から現地医療への引継ぎを進めました。一方で被災者が不安を抱くことがないように救護班の訪問する頻度を徐々に下げながら避難所に巡回する計画をたててそれを救護班に伝え、救護班からは

各避難所での困りごとを聞き取って問題あれば解決でそうなほかの団体へお願いしたり、次に訪問する救護班にフォローをお願いしたりしました。

結局現地で活動した５日間はずっと市役所の調整本部の部屋でミーティングと書類作成で終わりました。活動終了後どうしても避難所の様子を見て肌で被災者の方々の状況を感じたいと思い、気になっていた避難所１か所に伝達事項があったため訪問しました。輪島の中では最も支援の入っている避難所であり受付から避難所を見ただけですが、小型テントで個室化できているとはいえ限られたスペースでありこの状態でまだ数か月過ごさないといけない被災者の方々のご苦労はいかばかりかと感じた次第です。

今回の派遣では医療ニーズの減少をふまえて現地医療への引継ぎを終えるめどを具体的に決めようと現地入りしましたが、任期中には道筋をつけたものの、その目処を具体的に決めるには至りませんでした。しかし被害の象徴とされる輪島の朝市通りに立つとまだまだ復興は遠く赤十字としても医療支援以外の支援は継続していかないといけないと感じました。

移動も含め１週間の派遣でしたが、その間病院での業務をサポートしてくれた同僚や外来の予約変更などに応じていただいた患者さんのおかげで現地に赴くことができました。改めて感謝いたします。

救護班へのオリエンテーション

救護班から活動の活動の報告を受ける

他の団体と救護方針について話し合い